

城東高校新聞

発行者 山 城 東
岡 高 校
高 校 新 聞 部
発行責任者 鈴 井 勝 之

翠緑祭を振り返って

翠緑祭も無事終了し、全てが思い出になろうとしている今も、スイジツは来年度に向かって既に動き始めている。その一つが、校長先生を交えた翠緑祭を振り返る座談会だ。新聞部が司会を務めた座談会の一部始終を報告する。

「翠緑祭」の意義を問う—スイジツ座談会—

司会 今年の工夫、反省点は。
イベントパート、アンケートの結果、男装女装コンテストを企画した。大変だったが成功した。オープニングは毎年同じタイムテーブルだったので、ゲスト公演時間を短縮し、有志1組と男装女装コンテストを増やした。



反省会の様子

失敗が重なり、チームワークのオーデイションを全校生徒の前でやったが、かえって生徒の反応が見られてよかった。新体育パート、新たにビックウェーブを行った。全学年で出来るので来年もやりた

私は、城東高校の教育を次のように考えています。何十年か先でしようが、その時代に皆さんが活躍するには、どのような力が求められるのか。そのために、城東高校の教育資源で何が出来るのか。何を重視するべきなのかと。

「タフであれ」 石井校長先生

これから、ますます多量でスピードアップすることでしょう。環境問題や文化の違いによる厳しい衝突も何とかしていかなくてはなりません。経済活動の競争は、ますます激化していくことでしよう。そうした時代、タフな精神力が必要ですよ。



ます。異なる意見を吸収し、協力し、何か創造していかなくてはなりません。翠緑祭準備の時間は限られています。翠緑祭が近づくと、焦りや危機感が高まってくる。

いとか、観客は盛り上がれなかったという色々な意見があった。来年度も競技内容を工夫したい。



庶務パート 変更点は劇のタイムテーブル。見たい劇が見られないという声があり、必ず1回は行けるようにした。プロジェクターの貸し出しを開始した。映像が増え、展示がおもしろくなったと思う。音類の劇が優遇されているという意見があった。確かに他のクラスは30分だが音楽学類は1時間、場所も音楽ホールだ。変更を検討したが、既に1時間で練習を始めていて今年は無理だった。

三日開催はどうなる？
校 ところ、体育祭が予定通り日曜日だったら困ったか？
体 アンケートでは3日間はきついという意見が多くあった。広 文化の部のエンディングを今年は3日目にして対応した。体育の部で観客に感謝を伝えたのも変更点。問題点は、3日間開催がスイジツが知らないところで決定した点。先生からも、明確な理由が示されなかった。生徒は「体力的に厳しい」「グラウンド設営が忙しい」「予行がないので準備ができなかった」という反対意見が全てを占めていた。

中でも中日は空けられなかった。もし火曜日に体育の部をした場合、雨が降るとセンター試験の出願に大きな影響が出る。それらをこちらが説明するべきだった。広 来年度は、スイジツの意見を交えてもらえないか？

校 それは難しい。広 勝手に決められると今年のように不満が出る。校 そうしたいが、早い段階で決める上に、日程上自動的に決まる部分があるので難しい。聞く事で期待をさせてはいけないので、こちらで

全制パート 2.5cm四方の折り紙を八万四千枚使って、ちぎりを生かさないのが辛い。今年、仕上がり粗雑だとブロックの減点を行い、完成度を上げた。広報パート オープニングのムービーを喜んでもらえた。看板は立体的に作成す

るのを禁止にしたが、厳しく取り締まりすぎた。例年夜遅くまでやっていたが、今年早く帰ることを心がけた。
校長 生徒の皆さんと双方の意見を交わして嬉しい。様々な苦労や努力があることはわかっていても、どうしても見ることがないので、大変勉強になる。今年も素晴らしい翠緑で、大勢が来てくれた。自分が犠牲になって参加者に楽しんでもらおうという気持ちで伝わるいい翠緑祭だった。全制は素晴らしいものだった。それをやる事で何を表現したかったのか、みんなやることが自分で意味があったのかという一つ一つの意味づけや狙いを聞きたい。翠緑は来年する事が決まっています。翠緑の為に色々な時間を潰している。それならそれだけの意味がある事をしなければならぬ。去年できたからそれを同様にやれば良いというのではまずい。来年やるか否かの判断が出来るまで深めて反省をし、それぞれ改めてパートや全体を眺めて、狙いを突き詰めて欲しい。一つのテーマの下に一致団結することに意味がある。



校 日程は学校全体で考えていかざるを得ない。後ろはセンター試験の出願があり延ばせない。前はブロック演技やフォークダンスの練習の期間が必要だ。厳しく

石井校長先生は、「タフであれ」とおっしゃっていた。昨年よりも良くするにはどうすればよいか、自問自答を繰り返して、周りの意見を取り入れつつ、さらに練り直す。その過程には周囲との軋轢もある。それらに耐え、期日までに完成させていく「タフさ」。これこそが校長先生の言う「タフ」だろう。スイジツにはそれがあろう。一体何が彼らスイジツをここまで「タフ」にしたのだろうか。それはやはり、城東への愛だ。座談会でも、それを痛感した。
もちろんスイジツだけに、翠緑祭を任せておいてよいはずがない。城東を愛する気持ちは、決してスイジツだけのものではない。スイジツに負けない「タフさ」を身につけ、我々全員で翠緑祭を創り上げていくのではないかと

決める事になる。司 校長先生は来年やるかやらないかまで反省するべきとおっしゃったが、それに關してはどうか？

広 昨年を踏襲した結果、基本方針も機能せず失敗した。もつと具体的な目標を決めておくべきだった。全 全制パートの最初の仕事に全校制作の意義を考えると、いう役割がある。今年もその機会は設けたが、メンバー内で誰も分からず、そのままになった。

広 かつこいいだけのテーマに形骸化している。テーマに沿ってやっていくには具体的なものにするべきだ。

司 生徒会としては？

執行部 テーマに対する意識は薄かった。テーマを重視しその年らしい翠緑になれればいいと思う。

司 校長先生が、スイズジに伝えたいことは？

校 翠緑は生徒が自分たちで作上げていくものだ。できるだけその部分を多くしたい。極端な話をすると1年生の間は失敗してもいい。成功することが目的ではない。自分達でやっていくこと、協力することを実感してもらいたい。

広 自分たちが参加してどうかというところでですか？

校 そうだね。自分たちがクラスやパートで、主導権を持つているものがあるかどうかを聞きたい。

2年 自分は生徒としても楽しんだ。脚本から背景、小道具等も自分達で作った。先生は生徒達だけではできないことを手伝ってくれた。先生も含めたクラス全体で劇を作りあげることができた。

校 いつごろから準備を開始したのか？

2年 僕らは準備が遅く、7月頃から1年 何をやるのかを決めるところから戸惑った。始めは映像で思っていたが、プロジェクトが借りられず、急にお化け屋敷になった。放課後に人が集まらなくて、最初は何も進まなかった。担任が教室に木を渡し、暗幕をかける場所を作るなどしてくれて、やっとな「大変だ」と気づき始め、怖がらせる仕掛けの案を出すようになった。そこからほうまきくようになり、みんなが一つのことをするのが楽しかった。当日は大勢来てくれ、達成感があった。来年はみんな最初から作りたい。

1年 夏休みの準備は、5人しか集まらなかった。やる気があるのか不安になった。「仮暮らしのア

リエツティ」をイメージした、来場者が小人の世界を実感できる体験型の展示は、ダンボールがいつ倒れるかわからないという、計画とは違うものとなった。それでも写真スポットとして、7割の人が写真撮ってくれて嬉しかった。

校 他のクラスが進んでいると焦らなかつたか。

1年 みんな同じように苦労していただろうが、焦りはもちろんあつた。

イ バンドで騒音を立てるので地域で挨拶回りをしている。とても翠緑を楽しみにして下さっている。「楽しみにしている」「今年も行くよ」等と温かい言葉をかけて頂いた。翠緑は、普段お世話になっている地域の方々に感謝をする場でもあると思つた。

庶務パート スイズジは翠緑で生徒が楽しむ裏方の仕事をやるため、生徒と関わる事が多い。堅い説明をすると、面倒くさいと思われ。準備も翠緑の一環なのでそういう時も楽しめる翠緑であつたらいい。分からない点を気軽に尋ねられるような姿勢をスイズジが見せていくと、更に良い翠緑になると思う。

海自の歌姫 三宅由佳莉さん（16期生）城東でコンサート 直撃インタビュー

海上自衛隊東京音楽隊初のヴォーカリストとして活躍されているソプラノ歌手の三宅由佳莉さんが、11月18日（月）城東でコンサートを開いた。三宅さんは、城東高校の16期生で、当日は「祈り」「アマルフィ」などを美しい歌声で披露し、音楽ホールに集まった三百人近い生徒を魅了した。



記者 高校生活はどんな3年間だったか？

三宅 もう本当に楽しくて。楽しかった思い出しか思い当たらない。笑顔あふれる高校で、友達の良い顔が支えになった。それぞれがいろいろな得意分野を持っていて、それらを認め合つて、支え合っている学校だった。記者 コンサートで

は「真つ白なキャンパスのように」と言われたが、この母校で歌われることで、何か気持ちが変わつたか？

三宅 はい。高校生の進みたいと思つてた。記者 高校時代に海自に入隊するというこ

見て、やはり十代の若者達もいろいろなものを抱えて生きていくんだということを実感した。今日私自身が感じたことを大切に、学校はもろろん、できるだけたくさんの場所演奏したい。

記者 初心に返つたということか？

三宅 ふるさとである岡山の地で歌えることが、やはり自分の原点に戻る、初心に帰るきっかけになったので、今回このような公演が開けて、とても感謝している。

記者 大学では音楽が専門であつたということだが、高校時代に既に決めていたのか？

三宅 はい。進みたいと思つてた。記者 高校時代に海自に入隊する



を想像していたか？

三宅 正直、全く想像していなかった。舞台女優を目指していた。ミュージカルが大好きで、舞台に立つて歌う女優を目指して大学に進むことを決意していたので、まさか自分がこうして岡山に戻ってきた時に自衛官の制服を着て戻ってくるとは、夢にも思っていなかった。就職が決まったことを初めて先生に報告した時に「自衛官になりました！」とワクワクドキドキしながら伝えたら、「三宅は舞台女優になるって言うてなかった？」とビックリされた顔を今でも思い出される。

また、一生懸命がんばることも目標だ。これまでもやってきたことではあるが、これからはずっと一生懸命するということとは変わらないうたい。こういつた「頑張る姿勢」を恥ずかしがらずに披露していきたい。

記者 改めて後輩にメッセージをどうぞ。

三宅 今日は再びここにきて、変わらぬ元気さや素直さ、明るささういったものを目の当たりにした。これからもずっとその自分の心に嘘を吐かない素直な気持ちで目標に進んで行つてほしい。



また、一生懸命がんばることも目標だ。これまでもやってきたことではあるが、これからはずっと一生懸命するということとは変わらないうたい。こういつた「頑張る姿勢」を恥ずかしがらずに披露していきたい。

記者 改めて後輩にメッセージをどうぞ。

三宅 今日は再びここにきて、変わらぬ元気さや素直さ、明るささういったものを目の当たりにした。これからもずっとその自分の心に嘘を吐かない素直な気持ちで目標に進んで行つてほしい。

